

ドリトル的 平衡

2021年11月30日朝新聞朝刊



スタビンスくん「ドリトル先生、連載中の物語もいよいよ後半の山場ですね」

ドリトル先生「うん。すべて動物たちの活躍のおかげだよ」

ス「このあと先生はガラパゴス諸島で、ダーウィンと歴史的な対面を果たすことになるのですね」

ド「そうだね。あれはなかなかのものだった」

ス「ところで、大疫病の波が急に収まってきたようですが」

ド「まだまだ油断はできないが、どうやらそのようだね」

ス「人間が行動を控えたからとか、予防注射をしたからとか、そういうことは連動していないようにも見えます」

ド「そうだね。スペイン風邪のときも、予防注射はまだなかったのに、なぜか流

行はあるときを境にすーっと退潮した」

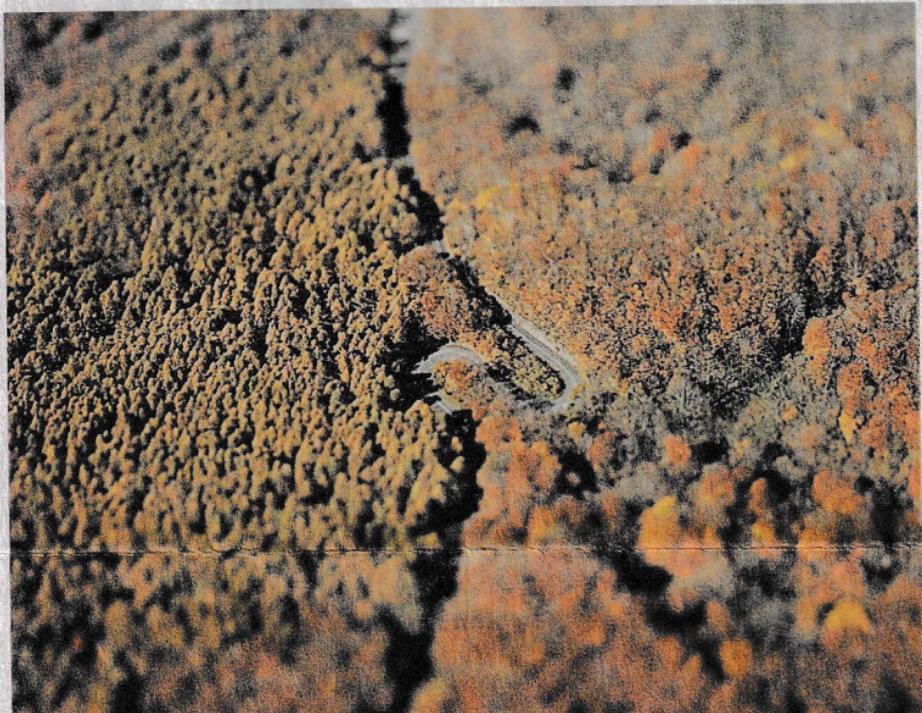
ス「病原体が増えないタイプに突然変異した、という見方もあるようですが、個々の病原体にそんな変異が起きることはあっても、それでは全体でそろって疫病が減少する説明がつきません」

ド「日本の今西錦司という生物学者は、種は変わるべくして一斉に変わる」と言ったよ」

ス「離れているものが、同時に共鳴しあうなんて、まるで量子論みたいですね」

ド「それは言いすぎかもしれないが、病原体の側だけから疫病を考える視点を転換したほうがいいかもしれない。つまり、病原体と宿主の力の均衡点が動く、ということがありうるということだよ。

宿主は単に病原体に軒先を貸して母屋を取られているわけではない。宿主細胞の



本城直季「plastic nature, forest, Fukushima/2017」

中では、絶えず、ものすごい速度で病原体が分解されている。これは免疫とは別の、生命本来の分解作用だ。自分自身をも分解している。この作用が少し優るだけで、病原体はもう増えることができなくなる。

流行の進展とともに、宿主の側の、心がまえ・体がまえのほうが一斉に変化するということは十分ありうるのだと思うよ。何事も、とが大事なんだ」

ス「と？」
ド「病原体と宿主のあいだの、と」ということだよ。つまり、ものごとはその関係性の界面にこそ注目すべきだということだね」

「新・ドリトル先生物語」の次回は12月1日に掲載します。